

論文

中国人日本語学習者のアクセントの弱化 の実現に影響する要因

趙水清

要旨：

本研究は、中国人日本語学習者による日本語発音におけるアクセントの弱化の実現に影響を与える要因を明らかにすることを目的とする。そのために、中国の大学に在学する学部生と大学院生を対象に生成調査を実施し、調査対象の2要素からなる句(以下、「句」と呼ぶ)の「構成要素のアクセント型」、「弱める文節の長さ」、「文環境」、及び「学習者の日本語学習時間」の4要因が学習者の弱化の実現に与える影響を検討した。

その結果、「構成要素のアクセント型」と「文環境」の二つの要因が弱化の実現に影響を与えていることが明らかとなった。具体的に、アクセント型に関しては、前部要素が「起伏式」の句において弱化の実現率が比較的高く、「平板+中高」および「平板+平板」の句では実現率が低い傾向が見られた。文環境に関しては、「独立性の弱い語」や「フォーカス後」の文環境で弱化の実現率が高く、「意味の限定」や「補助動詞」の文環境では実現率が低いことが確認された。一方で、「弱める文節の長さ」は、弱化の実現に有意な影響を与えなかった。また、アクセントの弱化は「学習者の日本語学習時間」が長くなると自然に上手になるわけではないことが示唆された。

本研究の成果は、アクセントの弱化を日本語音声教育に取り入れる重要性を示すとともに、今後の指導法を検討する上で有益な基礎資料となる。

キーワード：アクセントの弱化、中国人日本語学習者、日本語音声教育、文環境、アクセント型

Abstract:

This study aims to identify the factors that influence the production of accent weakening by Chinese learners of Japanese. Through a pronunciation task and a judgment task, the effects of four factors—accent patterns, word length, sentence environment, and Japanese language proficiency—on the production of accent weakening were examined.

The results revealed that two factors, namely “accent patterns” and “sentence environment,” significantly influenced the occurrence of weakening. Regarding accent patterns, the production rate of weakening was relatively high for word groups beginning with a “kernel-bearing” pattern, while it was lower for groups with “flat + middle-high” and “flat + flat” patterns. As for sentence environment, the rate of weakening was higher in environments such as “less independent words” and “post-focus,” and lower in “restrictive” and “auxiliary verb” contexts. On the other hand, word length and learners’ proficiency in Japanese did not show significant effects on the production of accent weakening.

These findings suggest the importance of incorporating pitch accent weakening into Japanese pronunciation instruction and provide valuable foundational data for developing future teaching methods.

Keywords: accent weakening、Chinese learners of Japanese、Japanese pronunciation instruction、sentence environment、accent patterns

1. はじめに

日本語の音調には、語レベルにおけるピッチの高低変化である「アクセント」と、句・文レベルにおけるピッチ変動である「イントネーション」とが区別される(前川 2004)。語ごとのアクセントを単純に連結しただけ

では、自然な文のイントネーションは実現されない。日本語においては、複数の語が意味的・統語的にまとまりを形成する際に「アクセント句」と「イントネーション句」を形成し、その過程において、先行語以外の語のピッチの変動が抑えられる「アクセントの弱化」と呼ばれる韻律現象が生じることがある(郡 1997)。この弱化現象は、日本語母語話者にとってはきわめて自然であり、韻律的まとまりを形成するうえで重要な役割を担っている。

一方で、中国の日本語教育現場に目を向けると、約9割の教師が語レベルのアクセント指導を行っているものの(劉 2025)、語アクセントを超える大きな韻律単位に関する指導は依然として十分ではない。これに対して、多くの日本語学習者は「自然なイントネーションで日本語を話したい」という強いニーズを有しており(戸田 2008)、その実現には語レベルのアクセントのみならず、文レベルにおけるピッチ変動、特にアクセントの弱化の理解と運用が不可欠である。

しかし、学習者のアクセントの弱化に関する先行研究はきわめて少なく、その実態や影響要因については十分に解明されていない。そこで本研究では、中国人日本語学習者を対象に、彼らがどのようにアクセントの弱化を生成するのか、その生成に影響を及ぼす要因は何かを考察することを目的とする。

2. 先行研究

2.1 「アクセントの弱化」とその影響要因

日本語のイントネーション構造の大枠を決めるのは「イントネーション句形成過程」と「ダウンステップ」と呼ばれる音調下降過程である(窪園 1995)。

まず、「イントネーション句形成過程」とは、二つ以上の語句が連続する場合に、最初の語句が平板式アクセントであれば、後続要素の語頭上昇が消失し、前部要素と融合する現象である。後部要素に生じるピッチ変化

は、従来「準アクセント」(神保 1925; 川上 1957)や「アクセントの弱化」(郡 1997)と呼ばれ、これにより形成される句全体の音調は「句音調」(川上 1957)として記述されてきた。

一方、「ダウンステップ」と呼ばれる音調下降過程は、最初の語句が起伏式アクセントである場合に後続要素が前部要素と融合せず、一段低い音調となる現象である。この現象は「カタセシス」(McCawley, 1968)、「ダウンステップ」(Pierrehumbert & Beckman, 1988)、および「アクセントの弱化」(郡 1997, 2008)として研究されている。郡(2008)は、ダウンステップはアクセントの弱化の一形態であると述べている。

これら2種類の韻律現象はいずれも、連続する語句の前部要素のアクセント型に起因し、主に後続要素のピッチ変化として現れる。郡(1997)は、後部要素に生じるこのようなピッチ変化を「アクセントの弱化」という概念で統一的に説明した。「アクセントの弱化」とは、「一語としてのアクセントの独立性を弱め、先行語と音調的に一体化しようとするプロセスである」(郡 1997: 126)。本研究では、連続する2要素からなる句の後部要素に生じるピッチ変化に注目するため、郡(1997)の用語を採用する。

郡(2020)によれば、アクセントの弱化には主に二つの形態がある。

(1) 弱める文節のすぐ前の文節にアクセントの下がり目がないときは、弱める文節の始まりの高さをそのすぐ前と同じ高さにそろえる。

(2) 弱める文節のすぐ前の文節にアクセントの下がり目があるときは、弱めるアクセントの山の高さを低く抑える。

以上より、構成要素のアクセント型はアクセントの弱化の形態を決定することが分かる。したがって、本研究では「構成要素のアクセント型」をアクセントの弱化の影響要因の一つとして設定した。さらに、「弱める文節の長さ」も弱化の度合いに影響することを郡(2008)が指摘した。具体的には、弱める文節が長いほど、アクセントの実現度が高く、すなわち、弱化の度合いが小さいことである。「構成要素のアクセント型」と「弱める文節の長さ」を合わせて、本研究ではこれらを「語環境」の要因と呼ぶ。

加えて、文環境もアクセントの弱化の発生の重要な影響要因である。郡(2020)は、アクセントの弱化が生じやすい文環境として、(1) 直前の文節

から意味が限定される場合(以下「意味の限定」)、(2) 補助動詞、(3) 独立性の弱い語、(4) フォーカスがある文節の後(以下「フォーカス後」)を挙げている。特に「意味の限定」と「フォーカス後」は、アクセントの弱化を引き起こす主な要因とされる。一般的に、意味的に限定される語は弱化し、限定されない語は弱化しない(郡 2008, 2020)。また、フォーカス以降の語群ではアクセントが弱化する(郡 1997)。本研究では、上記の(1)～(4)を「文環境」の要因として扱う。

2.2 学習者のアクセントの弱化に関する研究

前節で述べたように、アクセントの弱化の実現は文環境と密接に関わっている。外国人学習者のアクセントの弱化に関しても、異なる文環境における調査がいくつか報告されている。

まず、意味的な限定と非限定の文環境に着目した研究として、Tayebeh(2018)がある。Tayebeh(2018)は、非限定関係の「XでY」構文と限定関係の「XのY」構文を用いて、イラン人学習者と母語話者がそれぞれの文をどのように韻律的に実現するかを調査した。その結果、限定関係の「XのY」構文において、母語話者は後部要素のピッチピークを抑え、全体として一つのイントネーション句を形成するのに対し、学習者は(1) 前部要素と後部要素で二つのイントネーション句を形成する場合と、(2) 前部要素の語アクセントを平板化して後部要素と一つのイントネーション句を形成する場合に分かれることが示された。

次に、フォーカスの文環境に着目した研究として、宇都木(2004)と趙(2016)が挙げられる。宇都木(2004)は韓国学習者を対象に、「修飾語＋被修飾語」構文を用いて、中立発話、前部フォーカス、後部フォーカスの韻律的特徴を分析した。その結果、学習者は前部フォーカスおよび後部フォーカスの場合には、母語話者と類似したイントネーションを形成するが、中立発話では二つのピッチの山を形成する傾向が見られ、つまり弱化がうまく実現されていないことが確認された。趙(2016)は中国人学習者を対象に、フォーカスの有無や位置が異なる文における韻律的特徴を調査した。その結果、学習者はフォーカス部分以降のピッチを十分に低く抑え

られず、弱化の実現が困難であることが明らかになった。

これらの研究から、日本語学習者は異なる文環境において共通して弱化の実現に困難を抱えていることが示唆される。しかし、これらの先行研究では、2.1 節で述べた「構成要素のアクセント型」や「弱める文節の長さ」と弱化との関係について十分な検討がなされていない。

さらに、日本語教育の観点からも課題が残されている。ある学習項目が明示的な指導を行わなくても学習時間の増加とともに自然に習得されるものであれば、授業時間を割いて指導する意義は低くなる。その意味で、アクセントの弱化の実現と学習時間との関連を明らかにすることは教育的に重要である。しかしながら、既存の研究では学習時間を要因として扱った調査は管見の限り見当たらない。

以上を踏まえると、弱化の問題がどのような語環境や文環境で生じやすいのか、また弱化の実現にどのような要因が影響を及ぼすのかについては、依然として十分に解明されていない。そこで本研究では、これらの点を明らかにするとともに、その知見を日本語音声教育への応用可能性の観点から検討する。

3. 研究概要

3.1 目的

本研究の目的は、中国人学習者の日本語発音におけるアクセントの弱化の問題と、その実現に影響を及ぼす要因を明らかにすることである。そのため、語環境、文環境の異なる2要素からなる句(以下、「句」と呼ぶ)を用いて学習者の発音を調査し、さらに母語話者による聴覚判定を実施する。その結果に基づき、弱化の実現に影響する要因を考察する。

本研究では、以下のリサーチ・クエスチョン(RQ)を設定する。

RQ1: 構成要素のアクセント型配置の違いによって、アクセントの弱化の実現状況は異なるか。

RQ2: 弱める文節の長さの違いによって、アクセントの弱化の実現状況は

異なるか。

RQ3：文環境の違いによって、アクセントの弱化の実現状況は異なるか。

RQ4：学習者の日本語学習時間の違いによって、アクセントの弱化の実現状況は異なるか。

3.2 調査内容

生成調査は二つの調査に分けて実施した。

調査1の内容は、アクセントの弱化の実現状況と「句の構成要素のアクセント型」および「弱める文節の長さ」との関連を明らかにするために設定した。調査内容は、助詞「の」で接続された、後部要素は前部要素によって限定される名詞句からなる。構成要素のアクセント型に関して、前部要素が「起伏」と「平板」の2種類で、後部要素が「頭高」「中高」「平板」の3種類の組み合わせからなる。弱める文節の長さに関して、後部要素が2、3、4モーラの語に設定した。調査内容の詳細は表1に示す。全部で18の句がある。

調査2の内容は、アクセントの弱化の実現状況と「文環境」との関係を明らかにするために設定した。アクセントの弱化が生じるとされる「意味

表1 調査1の調査内容

句番号	調査内容	アクセント型	モーラ
W01	秋の空	起伏+頭高	3モーラ+2モーラ
W02	空の色	起伏+中高	3モーラ+2モーラ
W03	海の浪	起伏+平板	3モーラ+2モーラ
W04	鳥の声	平板+頭高	3モーラ+2モーラ
W05	風の音	平板+中高	3モーラ+2モーラ
W06	道の横	平板+平板	3モーラ+2モーラ
W07	声の高さ	起伏+頭高	3モーラ+3モーラ
W08	海の向こう	起伏+中高	3モーラ+3モーラ
W09	今日の昼間	起伏+平板	3モーラ+3モーラ
W10	風の速さ	平板+頭高	3モーラ+3モーラ
W11	姉のおもちゃ	平板+中高	3モーラ+3モーラ
W12	椅子の後ろ	平板+平板	3モーラ+3モーラ
W13	黒のネクタイ	起伏+頭高	3モーラ+4モーラ
W14	駅の駅員	起伏+中高	3モーラ+4モーラ
W15	兄の作文	起伏+平板	3モーラ+4モーラ
W16	牛の赤ちゃん	平板+頭高	3モーラ+4モーラ
W17	右の建物	平板+中高	3モーラ+4モーラ
W18	そこの居酒屋	平板+平板	3モーラ+4モーラ

表 2 調査 2 の調査内容

句番号	アクセント型	キャリア文（下線部分は調査内容）	文環境
S01	起伏+	ホテルの料金は9000円です。	意味の限定（名詞+の+名詞）
S02	平板+	お店の階段はボロボロでした。	意味の限定（名詞+の+名詞）
S03	起伏+	わたしは便利な都市に住んでみたいです。	意味の限定（形容詞類+名詞）
S04	平板+	彼は嫌いな運動はありません。	意味の限定（形容詞類+名詞）
S05	起伏+	この結果はきわめて残念です	意味の限定（副詞類+形容詞類）
S06	平板+	彼女の手は大変冷たいです。	意味の限定（副詞類+形容詞類）
S07	起伏+	年末は大掃除をしてずいぶん疲れた。	意味の限定（副詞類+動詞）
S08	平板+	以前勉強した中国語はだいたい忘れた。	意味の限定（副詞類+動詞）
S09	起伏+	今の生活は美術を楽しむことができます。	意味の限定（名詞+助詞+動詞）
S10	平板+	彼は英語を教える先生をしています。	意味の限定（名詞+助詞+動詞）
S11	平板+	友だちを駅まで迎えに行っておきました。	補助動詞
S12	起伏+	子どもに絵本を讀んであげました。	補助動詞
S13	平板+	街の人に道を教えてもらいました。	補助動詞
S14	起伏+	おばあさんに子どもの面倒を見てもらいました	補助動詞
S15	平板+	誕生日にみんながお祝いしてくれました。	補助動詞
S16	起伏+	暑いので、先生は窓を開いてくれました。	補助動詞
S17	起伏+	私は整理することが上手です。	独立性が弱い語
S18	起伏+	今日は台風のため、イベントが中止になりました。	独立性が弱い語
S19	起伏+	急用ができて、今日は帰るつもりです。	独立性が弱い語
S20	平板+	私は散歩することが好きです。	独立性が弱い語
S21	平板+	彼は高齢のため、体が動きにくいです。	独立性が弱い語
S22	平板+	試験が終わったので、今日は遊ぶつもりです。	独立性が弱い語
S23	起伏+	問：これはどこの料理ですか？	フォーカス後
		答：これは中国の料理です。	
S24	起伏+	問：これはどのお金ですか	フォーカス後
		答：これは中国のお金です。	
S25	平板+	問：これはどこの料理ですか？	フォーカス後
		これはイギリスの料理です。	
S26	平板+	問：これはどのお金ですか	フォーカス後
		これはイギリスのお金です。	

の限定」「補助動詞」「独立性の弱い語」「フォーカス後」の4種類の文環境を対象とし、26の句を作成した。そのうち「独立性の弱い語」は形式名詞に限定して句を設定した。調査内容がより自然に発音されるよう、すべての句をキャリア文に埋め込んで提示した。調査語のアクセント型の影響を避けるために、各文環境について、「起伏型」と「平板型」から始まる2種類の句を設定した。詳細は表2に示す。

3.3 調査協力者

生成調査に参加したのは中国・大連にある3大学に在学する日本語専攻の学部2年生、もしくは、日本語翻訳・日本語通訳を専門とする大学院1年生それぞれ15名の中国人日本語学習者である(以下、「学習者」と呼ぶ)。

学部2年生は全員、大学入学後に日本語学習を開始し、日本語学習歴は1年3ヶ月である。大学院生は日本語学習歴が長く、4年3ヶ月から9年2ヶ月の範囲に分布していた。学部2年生はこれまでにJLPTに合格した経験はない。大学院生は全員がJLPT N1に合格している。学習者は全員、日本に1ヶ月以上の長期滞在をした経験がない。

3.4 手続き

調査1と調査2を分けて、生成調査を実施した。調査内容をそれぞれランダム順に並べ替え、PowerPointで調査内容のスライドを作成した。パソコン画面で提示された内容を読み上げてもらい、ICレコーダーで録音した。生成調査後、生成調査のすべての調査協力者を対象に、今まで日本語のアクセント、イントネーションなどを含む韻律項目の学習経験についてフォローアップインタビューをした。

調査1と調査2の録音データを、日本語母語話者が聞いて、対象音声にアクセントの弱化が生じているか否かを聴覚で判定した。判定に参加したのは、大学院で音声学や音声教育を専門とし、博士号または修士号を有する日本語母語話者3名である。本研究では発音の音の高低(ピッチ)だけに注目してアクセントの弱化の有無を判定してもらうため、音声学に関する専門知識を有する母語話者が判定者として適任だと判断した。

判定は「アクセントの弱化の有無」と「自信度」の2項目に基づいて行った。「アクセントの弱化の有無」について、「はい」「いいえ」「判定不能」から選択できる。2.1で述べたように、弱化のパターンは構成語のアクセント型と深く関わっているため、語アクセントが間違っていれば弱化の判定ができない。その場合は、「判定不能」を選択させた。「自信度」に関しては、判定の自信の度合いに応じて1～3で選択させた(図1)。

調査で得られた音声データは全部で1320件である。1320件の音声データに対して3名の判定者がアクセントの弱化の有無を判定した。判定者間の信頼性を調べるために、アクセントの弱化の判定結果の「はい」「いいえ」「判定不能」をもとに、3名の判定者間の Fleiss' Kappa を算出した。

その結果、 $k=0.69$, $p=0.00$ となり、Landis & Koch (1977) の基準に照ら



図1 評価調査の画面

すと「高い一致度」に該当することがわかった。これにより、本研究における判定者の判定には十分な信頼性があると判断した。

次に、「アクセントの弱化の有無」と「自信度」の選択をもとに判定結果を整理した。弱化の有無の判定が「はい」かつ自信度が2以上の場合は「弱化あり」、弱化の有無の判定が「いいえ」かつ自信度が2以上の場合は「弱化なし」とした。いずれの判定においても自信度が1の場合は「曖昧な発音」とした。なお、「判定不能」のデータは分析対象から排除した。判定調査の選択と判定結果の対応関係を表3に示す。

3名の判定者のうち、2名以上が同じ判定結果の場合にその結果を採用する。3名がそれぞれ違う判定をする場合に分析対象外とする。最終的に弱化の分析対象となるデータは、調査1は634件、調査2は408件、合計1042件となった。

表3 判定調査の選択と判定結果の対応関係

弱化の有無の結果	自信度の結果	判定結果
はい	3	弱化あり
はい	2	弱化あり
はい	1	曖昧な発音
いいえ	1	曖昧な発音
いいえ	2	弱化なし
いいえ	3	弱化なし

4. 結果

4.1 「構成要素のアクセント型」とアクセントの弱化の実現状況

構成要素のアクセント型別の弱化の実現状況を見るために、調査1の有効データ(N=634)をもとに、「弱化あり」「曖昧な発音」「弱化なし」の各判定結果の件数を統計的に分析した。結果を図2に示す。

図2からわかるように、前部要素が「起伏式」の句では「弱化あり」の発音が圧倒的に多い。一方で、「平板+頭高」と「平板+平板」の句では「弱化なし」の発音が多い。構成要素のアクセント型によって判定結果に有意な違いがあるかを調べるために、判定結果(3水準)×アクセント型(6水準)のカイ二乗検定を行った。

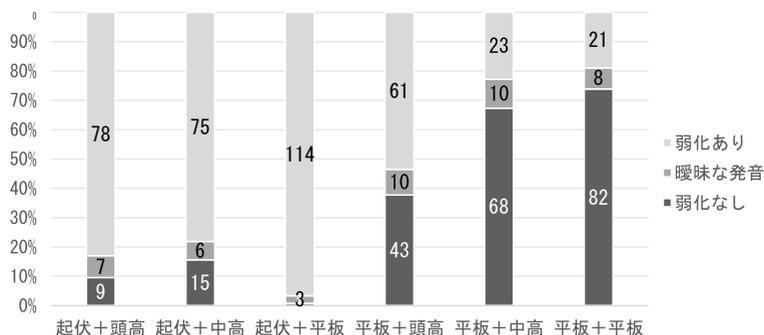


図2 アクセント型別の弱化の判定結果 (数字は件数)

カイ二乗検定の結果、各アクセント型では、判定結果に有意な偏りが認められた($\chi^2(10) = 250.26, p = .00, V = .44$)。残差分析の結果、起伏式から始まるすべてのアクセント型において、「弱化あり」の発音が有意に多く、「弱化なし」の発音が有意に少ないことがわかった。一方、「平板+中高」と「平板+平板」の場合に、「弱化なし」の発音が有意に多く、「弱化あり」が有意に少ない結果となった。「平板+頭高」に関しては、有意差が出な

かった。

また、アクセント型の要因の効果量を見ると、Cramer's $V = 0.44$ で、Cohen (1988) によれば効果量が中～大効果であることがわかった。

本結果から、構成要素のアクセント型によって、アクセントの弱化の実現状況に大きな差があることが明らかとなった。具体的に、前部要素が起伏式の句は比較的よく弱化が実現され、「平板+中高」と「平板+平板」のアクセント型の場合に、弱化がうまく実現されないことがわかった。

4.2 「弱める文節の長さ」とアクセントの弱化の実現状況

弱める文節の長さ別の弱化の実現状況を見るために、調査1の有効データ ($N=634$) をもとに、「弱化あり」「曖昧な発音」「弱化なし」の各判定結果の件数を統計的に分析した。結果を図3に示す。

図3を見ると、全体的に、モーラ数による判定結果の違いは顕著ではない。長さによって判定結果に有意な違いがあるかを調べるために、判定結果(3水準)×長さ(3水準)のカイ二乗検定を行った。

カイ二乗検定の結果、各モーラ数では、判定結果に有意な偏りがないことがわかった ($\chi^2(4) = 7.80, p = .10$)。本結果から、弱める文節の長さの要因は学習者のアクセントの弱化の実現状況に影響する主要因ではないことがわかった。

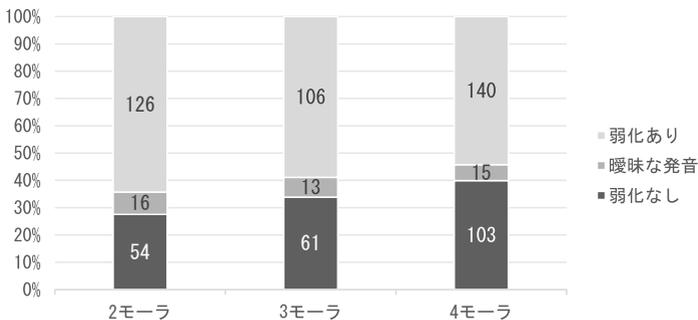


図3 モーラ数別の弱化の判定結果 (数字は件数)

4.3 「文環境」とアクセントの弱化の実現状況

文環境別の弱化の実現状況を見るために、調査2の有効データ(N=408)をもとに、各判定結果の件数を統計的に分析した。結果を図4に示す。

図4を見ると、「意味の限定」と「補助動詞」の文環境において、「弱化あり」の発音が少なく、「独立性の弱い語」と「フォーカス後」の文環境において「弱化あり」が多いことが観察された。文環境による弱化の実現状況の差を検討するため、判定結果(3水準)×文環境(4水準)のカイ二乗検定を行った。

カイ二乗検定の結果、各文環境では、判定結果に有意な偏りが認められた($\chi^2(6) = 48.45, p = .00, V = .24$)。残差分析の結果、「独立性の弱い語」と「フォーカス後」の文環境において「弱化あり」の発音が有意に多く、「弱化なし」の発音が有意に少ないことがわかった。一方、「意味の限定」と「補助動詞」の場合に、「弱化なし」の発音が有意に多く、「弱化あり」が有意に少ないことがわかった。また、アクセント型の要因の効果量を見ると、Cramer's $V = 0.24$ で、効果量が小～中効果であることがわかった。

本結果から、文環境の違いは、学習者のアクセントの弱化の実現状況に影響する要因であることが明らかとなった。

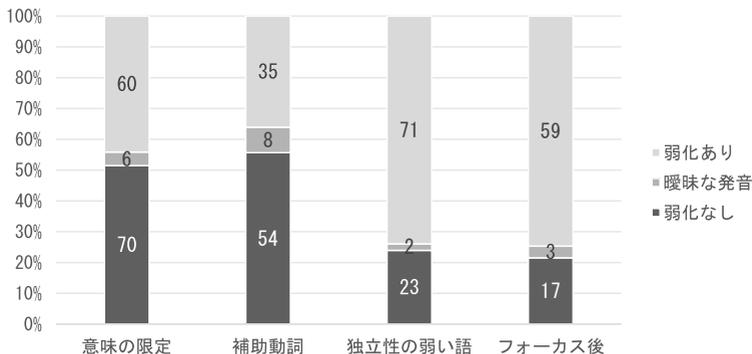


図4 文環境別の弱化の判定結果 (数字は件数)

4.4 「学習者の日本語学習時間」とアクセントの弱化の実現状況

日本語学習時間の異なる2グループの発音において、弱化の実現状況に違いがあるかを調べるために、調査1と調査2の音声データ($N = 1042$)をもとに、各判定結果の件数を統計的に分析した。結果を図5に示す。

図5を見ると、両グループ間で判定結果に大きな差は観察されなかった。両グループで弱化の実現状況に有意な違いがあるかどうかを調べるために、判定結果(3水準)×日本語学習時間(2水準)のカイ二乗検定を行った。

その結果、両群の間に有意な偏りがなかった($\chi^2(2) = 3.91, p = .14$)。この結果から、アクセントの弱化の実現状況は学習者の日本語学習時間とあまり関係ないことがわかった。

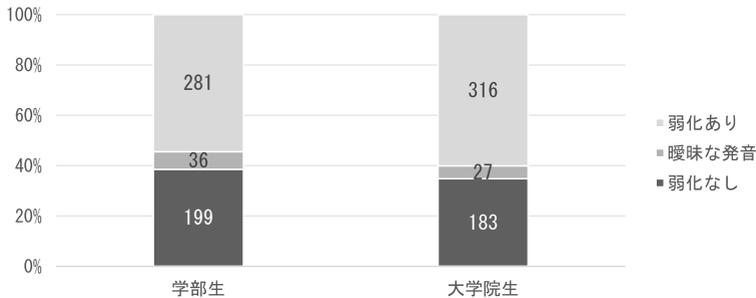


図5 学部生グループと大学院生グループの発音の判定結果

5. 考察

5.1 「構成要素のアクセント」とアクセントの弱化

RQ1の「構成要素のアクセント型配置の違いにより、アクセントの弱化の実現状況は異なるか」については、構成要素のアクセント型によって、アクセントの弱化の実現状況に明確な差があることが明らかとなった。特に、前部要素が「平板式」の句は、前部要素が「起伏式」の句に比

べて弱化の実現率が低いのは、注目すべき傾向である。

前部要素が「起伏式」の句では、後部要素の冒頭に一定のピッチ上昇があっても、聞き手には弱化されていると知覚されやすい。実際、日本人を対象とした読み上げ調査においても、後部要素の冒頭に一定の上昇が確認された(郡 2012)。一方、前部要素が「平板式」の句では、後部要素に新たなピッチ上昇が生じると、文全体としては一つのアクセント単位として知覚されにくくなり、結果として弱化が実現されていないと判断される。

フォローアップインタビュー調査により、中国の教育現場ではアクセントを語レベルでのみ指導し、語と語が連結した際のピッチ変化に関する指導が不十分であることが確認された。そして、アクセントの特徴として、語の第1モーラと第2モーラの高さが異なり、頭高型を除く全てのアクセント型については、「第1モーラが低く、第2モーラが高い」と指導されていることがわかった。そのため、前部要素が「平板式」の句において、後部要素の語頭に不自然なピッチの上昇が観察され、弱化の判定率が低くなったと考えられる。

この結果は、アクセントにおける語頭のピッチ上昇の説明および韻律指導方法の見直しの必要性を示唆している。語頭の上昇を句の特徴とみなす立場(川上 1957、上野 1989)と、語固有の特徴とみなす立場(郡 2004)などがあるが、教育者はいずれの立場をとるにせよ、語単独で発音する際の高低配置と文中でのピッチ配置の違いを明示的に教える必要がある。語レベルの高低のみを重視する教育では、自然なイントネーションの産出を阻害し、結果的に弱化の実現を困難にしていることが示された。

5.2 「弱める文節の長さ」とアクセントの弱化

RQ2の「弱める文節の長さの違いにより、アクセントの弱化の実現状況は異なるか」については、弱める文節の長さが2モーラ～4モーラの場合、長さの要因は弱化の実現状況にはほとんど影響しないことが明らかになった。

郡(2008)では、文節が長くなるとアクセントの実現度も高まると指摘された。その場合、弱化が知覚されにくくなる可能性があるが、本研究で

は2モーラから4モーラの語において、弱化の知覚上に有意な差は確認されなかった。これは、今回の調査対象の長さの差が比較的小さく、知覚的な違いを引き起こすには不十分であった可能性がある。今後は調査対象のモーラ数を更に増やして調査すれば有意差が出るかもしれないが、少なくとも、文節の長さという要因は、アクセントの弱化の実現に対して決定的な影響を及ぼすものではないと言える。

今後アクセントの弱化について指導する際に、特に2モーラから4モーラの基本語彙が集中する学習初期から中級段階においては、語の長さに注目するよりも、構成要素のアクセント型による変化や、文環境の違いに重点を置いて指導することが望ましい。

5.3 「文環境」とアクセントの弱化

RQ3の「文環境の違いにより、アクセントの弱化の実現状況は異なるか」については、文環境がアクセントの弱化の実現に影響を及ぼすことが確認された。特に、「独立性の弱い語」と「フォーカス後」の環境では弱化がよく実現され、「意味の限定」と「補助動詞」の環境では弱化が十分実現されなかった。

まず、「意味の限定」は日本語の文中に最もよく現れる文環境の一つである。通常、限定された語が弱化されることが多い(郡2008)。そのため、弱化が実現されない場合、意図せずフォーカスが置かれたように聞こえ、結果として聞き手に不自然な印象を与える可能性がある。

次に、「補助動詞」は自然な日本語において大きく弱化されるべきだが、本研究では中国人学習者が弱化しないで発音する傾向が見られた。この点については、郡(2019)も指摘しており、補助動詞が弱化されない場合、母語話者に強い違和感を与えるとされる。本研究の結果を踏まえ、今後の発音指導においては、「意味の限定」と「補助動詞」を含む文環境におけるアクセントの弱化に特に留意する必要がある。

本研究の結果から、「独立性の弱い語」と「フォーカス後」の文環境では、アクセントの弱化の実現率が比較的に高いことが明らかになった。これらの文環境で弱化の実現率に差が生じた原因として、「情報構造」と関

連していると考えられる。例えば、「散歩すること」(表2、S20)「高齢のため」(表2、S21)のような「独立性の弱い語」の場合、前部要素が新情報を担い、情報的な重みを有している。この点において、情報の焦点である「フォーカス」と類似している。情報的な重みのある部分と比べ、後続要素は情報的な重みが小さく、その結果、音声的にも自然にピッチが低下すると予測される。実際、中国語においても、意味的な焦点を表す「音調核」に後続する音節は「軽化」され、すなわち低く目立たない形で発音される現象が報告されている(沈1994)。中国語の正の転移を受け、中国語母語話者は日本語を産出する際にも、焦点以降の要素の弱化を比較的円滑に実現できると考えられる。これに対して、「ホテルの料金」(表2、S01)のような「意味的限定」の文環境では、「ホテル」と「料金」のいずれが情報の中心であるかが明確ではない。そのため、学習者は両要素を同程度の高さで発音する傾向があり、結果として弱化が十分に実現されないものと推察される。

実際に、「フォーカス後」の文環境においては、弱化が実現されていないケース(17件)も散見された。これは趙(2016)が指摘したフォーカス以降の語群が低く抑えられない結果と一致している。これに関しては、母語の転移と情報構造の影響では説明しきれず、学習者の中間言語の特徴であると考えられる。

5.4 「学習者の日本語学習時間」とアクセントの弱化

RQ4の「学習者の日本語学習時間の違いにより、アクセントの弱化の実現状況は異なるか」については、学部生グループと大学院生グループとの間で、アクセントの弱化の実現度に顕著な差は認められなかった。この結果は、弱化という韻律現象が、単なる学習時間の経過では習得されにくいことを示唆している。

その要因として、以下の2点が考えられる。第一に、中国の教育現場では、語アクセントが「決まったモーラごとの高低配置」として理解されている点である。例えば、平板式の「わたし」「なまえ」のアクセントを「低高高」として理解することである。そのため、「わたしのなまえ」を発

音する際に「低高高高低高高」と実現することが、学習者にとっては「正しいアクセント」と認識されてしまう。このような先入観を持った学習者は、正しいインプットを受けても自身の発音上の問題点に気づきにくい。結果として、学習時間の経過にもかかわらず、弱化の不自然さが改善されにくいのである。

第二に、教育現場において「アクセントの弱化」に明示的に注意を向けさせる指導が十分に行われていない点である。Schmidt (1990) が指摘したように、学習者は現象に対して明示的に「気づく」ことによって初めて習得プロセスが始まる。アクセントの弱化は、指摘がなければ気づきにくい現象である。したがって、アクセントの弱化に関しては、自然習得に任すのではなく、学習者の気づきを意図的に喚起する教育的な働きかけが不可欠である。

以上より、中国における日本語教育においては、語アクセントの理解を再考するとともに、学習者がアクセントの弱化への気づきを促す教育的工夫が求められる。

6. まとめ

本研究では、中国人日本語学習者によるアクセントの弱化の実現状況に関して、「構成要素のアクセント型」、「弱める文節の長さ」、「文環境」、「学習者の日本語学習時間」の4つの要因が影響を与えるかを検証した。その結果、構成要素のアクセント型と文環境が弱化の実現に有意な影響を与えることが明らかになった。特に、「起伏式」で始まる語や「フォーカス後」「独立性の弱い語」の文環境では、弱化が比較的良好に実現された。一方、「平板式」から始まる語や「意味の限定」「補助動詞」の文環境では、弱化が実現されない発音が多かった。「弱める文節の長さ」や「学習者の日本語学習時間」については、弱化の実現に明確な影響は確認されなかった。

現在の中国の日本語教育では、語レベルのアクセントに偏った指導が行われており、文中での韻律変化、とりわけ弱化現象に対する体系的な指導

が不十分である。アクセントの弱化は、語レベルの高低から、文全体のイントネーションへとつながる重要な橋渡しであり、今後の音声教育においてその重要性が再認識されるべきである。

本研究で得られた知見は、今後アクセントの弱化について指導する際に、どのような部分に重点を置いて指導すればいいかを考案するための重要な基礎資料となると考えられる。

参考文献

- 上野善道 (1989) 「日本語のアクセント」 杉藤美代子編 『日本語の音声・音韻 (上)』 講座日本語と日本語教育 2: pp.178–205.
- 宇都木昭 (2004) 「韓国人日本語学習者の日本語におけるフォーカス発話と中立発話の音声的・音韻的特徴」 『音声研究』 8 (1): pp.69–108.
- 川上葵 (1957) 「準アクセントについて」 『国語研究』 7: pp.44–60.
- 窪菌晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』 くろしお出版.
- 郡史郎 (1997) 「当時の村山首相」の2つの意味と2つの読み—名詞句の意味構造とアクセント弱化について— 『音声と文法』 pp.123–146. くろしお出版.
- 郡史郎 (2004) 「東京アクセントの特徴再考—語頭の上昇の扱いについて—」 『国語学』 55 (2): pp.16–31.
- 郡史郎 (2008) 「東京方言におけるアクセントの実現度と意味的限定」 『音声研究』 12 (1): pp.34–53.
- 郡史郎 (2012) 「東京方言における意味的限定と非限定を区別する音声的基準—短文読み上げ資料と合成音声聴取実験によるアクセント実現度の検討」 『言語文化研究』 30: pp.1–22.
- 郡史郎 (2019) 「アクセントとイントネーションの逸脱に対して感じる違和感について」 『言語文化共同研究プロジェクト 2018』 pp.17–28.
- 郡史郎 (2020) 『日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用』 大修館書店.
- 神保格 (1925) 『國語音聲學』 明治図書株式會社.
- 趙水清 (2016) 「中国語母語話者によるフォーカス発音に関する一考察—一意図伝達に影響する要因を中心に—」 『早稲田日本語教育学』 21: pp.17–36.
- 戸田貴子 (2008) 「日本語学習者音声に関する問題点」 戸田貴子編著 『日本語教育と音声』 pp.23–41. くろしお出版.
- 前川喜久雄 (2004) 「イントネーション」 『言語の科学 2 音声』 pp.40–47. 岩波書店.

- 劉羅麟 (2025) 「中国の高等教育機関における日本語教師の音声教育観と指導実態—BEO モデルに基づくアンケート調査の結果から—」 『音声研究』 29 (2): pp.155–168.
- Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences* (2nd ed.). Lawrence Erlbaum.
- Landis, J. R., & Koch, G. G. (1977). The measurement of observer agreement for categorical data. *Biometrics*, 33(1), 159–174.
- McCawley, J. D. (1968). *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague, Paris: Mouton.
- Pierrehumbert J., & Beckman M. (1988). *Japanese Tone Structure*. Cambridge: MIT press.
- Schmidt, R. W. (1990). The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics*, 11(2), 129–158.
- Tayebeh Norouzi (2018) 「イラン人日本語学習者の日本語によるアクセント弱化の実現—限定・非限定の場合」 『筑波応用言語学研究』 25: pp.1–18.
- 沈炯 (1994) “汉语语调构造与语调类型” 《方言》1994 年第 3 期. 北京: 中国社会科学出版社.